
GHOST † HUNTERS

羅魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GHOST†HUNTERS

【Nコード】

N4526G

【作者名】

羅魅

【あらすじ】

とある不思議な世界のお話。この世界には、霊を操り、人間の魂を吸い、その魂の力で霊だけの世界を作ろうとする、霊魂軍と名乗る謎の集団が現れた。その計画を阻止べく立てられた組織『GHOST†HUNTERS』その組織に所属する、主人公折慶（14歳・独身w）GHOST†HUNTERSの戦士達と、霊魂団との、壮絶（？）な闘いが今、幕を開けるっ！！

霊滅師　くゴースト・ハンターズく

「うわあああつ、ゴ、^{ゴースト}霊だ！

早く、誰か早く^{ゴースト}GHOST　^{ハンター}HUNTER　を呼んでくれえつ！
」

ざわっ・・・（住人が騒ぎ出す）

ブルルルル・・・

『もしもし、^{ケイ}慶くん？　今、東地区で、霊が現れたの！　行けるかしら？』

「ああ、大体1分くらいで着くはずだけど・・・」

『じゃあ、お願いね』

「了解！」

俺は、^{シキオリ}式折　^{ケイ}慶

この世界には、突如、霊を操り、人間の魂を吸い、その魂の力で霊だけの世界を作ろうとする、霊魂軍と名乗る、謎の集団が現れた。

その計画を阻止すべく、立ち上げられたのが、俺の所属する組織『^{ゴースト}GHOST　＋　^{ハンターズ}HUNTERS』だ。

この組織には、霊を滅する特別な力を持った者が集まっている。

そろそろ、現場に着きそうだ。

「せりやあつ！」

ザシュッ！！

「よし、この程度の霊なら、一撃で倒せるようになったな・・・」

「どうも、ありがとうございます・・・」

「ああ、礼にはおよばねえよ」

そう言って、俺はその場を去った。

朱音の家へ・・・

『GHOST + HUNTERS』の戦士は、一人一人が自分に適合した武器を持っている。

その武器は『霊滅武器』と呼ばれ、決まった者だけが、扱う事ができる。

この武器を使うと、霊体にダメージを与えることができる。

俺の武器は、『滅霊剣』名の通り、剣形の武器だ。

この他にも、武器は色々な種類があるが、それはまた今度説明しよう。

さっき倒したのは、普通の下級霊だ。

だが、最近になってから、奴らに指示を出している者が居る事が判明した。

詳しい事はまだ分かっていないが、俺たちはその指令者を『霊操者』と呼び、さらにその上に立つ者を『霊操王』と呼んでいる。

『GHOST + HUNTERS』は、普段は霊滅団と呼ばれている。

今日は、その霊滅団の仲間であり、同級生でもある、朱音の家へ行く事になっている。

何をしに行くかというと、遊びに行く訳ではない。

本部から、二人で下級霊数体と戦ってほしいとの指示が出たのだ。

俺は、ドアの前に立ち、チャイムを鳴らした。

『ピンポーン』

「どなたですか？」

俺は、返答する。

「シキオリ式折です」

「ああ、ケイ慶君ね、ちょっと待ってね、開けるから」

・・・、しばらくして、玄関のドアが開いた。

「こんにちは」

朱音の母が笑顔で迎えてくれた。

俺も、あいさつする。

「こんにちは」

「あがつていいわよ」

「はい、お邪魔します」

「朱音に用かしら？」

「あ、はい、ちょっと・・・」

俺は、2階に上がり、朱音の部屋をノックした。

『コン、コン』

「朱音、入るぞ？」

朱音の部屋／自宅

俺は、ドアノブに手をかけた。
そのまま、ドアを開く。

「何の用？」

いきなり、聞かれた。

「いや、実はな・・・」

俺は、ココに来た理由を話した。

「はぁ？私と、アンタが？」

「何か文句でもあんのかよ！？」

「いや、無い」

「無いなら言うなよっ！」

「あゝもう、いちいち五月蠅いわね！」

「お前が文句ねえのに、はぁ？、とか言うのが悪いんだよ！」

「分かったわよ、謝ればいいんでしょ！？」

「いや、別にそこまでは・・・」

「・・・」

二人の間に、沈黙がながれる・・・

先に口を開いたのは、アカネ朱音だった。

「とにかく、ケイ慶と私で、ゴースト下級霊を倒しに行けばいいんでしょ？」

「ん？ ああ、そうだ・・・」

「場所」

「は？」

「場所は？」

「え、いや・・・」

「アンタ馬鹿？ 場所分かんないや意味ないでしょ!？」

「馬鹿で悪かったな!!」

朱音はそれ以上、言ってこなかった。

「本部に聞くから、ちょっと待ってくれ・・・」

『はい、こちら、GHOST + HUNTERS本部』

『あ、式折 慶です』

『シキオリ ケイ君ね・・・ちょっと待って』

「はい・・・」

おそらく、俺のことをあまり知らない人なのだろう。一応、本人が確認をしてるんだろう。

『はい、いいわよ、要件は?』

「えっと、今度の下級霊討伐の話なんです」

『ええ、それで?』

「えっと・・・、俺たちの担当区域はどこでしょうか?」

『ええっと・・・、西地区よ』

けど、どこに来るか分からないから、他の地区にも何人か人は行かせるらしいわ』

「そうですか、ありがとうございます」

電話を切って、電話をポケットにおした。

「西地区だつてよ」

「西地区ね、分かったわ」

「じゃあ、また今度」

「うん」

俺は、朱音の部屋を出て、階段を下りた。

「もう帰るの?」

朱音の母が聞いてきた。

「あ、ハイ」

「そう、じゃあね」

「はい、お邪魔しました」

玄関を出て、自分の家へ向かう。

数分で、家に着いた。

玄関を開けて、中に入る。

「ただいま」

（つて、誰も居なかったな・・・）

俺の親は二人とも働いていて、夜遅くまで帰ってこない。
なので、夕飯作りなどは全て自分でやる。

俺は、てきとうに夕飯を作り、歯磨きをして、風呂に入った。
特に見たいテレビや、ハマっているゲームも無かったので、しばらく本を読んで、寝た。

戦いに備えて・・・

「ふあああ・・・」

「ん？ 朝か・・・」

俺は、ベッドから降りた。

今日は、特に用事は無い。

かと言つて、休みの期間なので、学校での授業も無い。

「する事ねえな・・・」

とりあえず、朝飯を作つて、洗濯をしたり、家事を一通りやった。

親は、朝早くから仕事に出ている。

暇だったので、誰かと遊ぼうかと思つたが、特に一緒にするような事も無い。

(とりあえず、^{ゴースト} GHOST + ^{ハンターズ} HUNTERSの本部にでも行つてみるか・・・)

本部には、司令室、食堂、倉庫、休憩所、技の練習などに使う部屋などがある。

あまり行つた事は無いので、よくは知らないが、他にもいくつか部屋がある。

本部に行けば、他に人が必ずいる、なので、暇なときはたまに行く。

本部は、町のほぼ中心にある、大きな建物だ。

俺や^{アカネ}朱音の家があるのは、南地区だ。

この町は、円に近い形で、それを、ほぼ4等分にして、東西南北で

地区分けしている。

そこまで大きい町じゃないので、自転車でも数十分あれば、だいた
いどんな場所にも行ける。

俺は、自転車を出して、本部へと走らせた。

「ふう、やっと着いたか」

「お、慶君ケイじゃないか」

さっそく知り合いに出会ったようだ・・・。

「白橋さん！」

この人は、白橋シラハシ 芹那セリナさん。

俺の先輩である。

何度か、一緒に敵と戦ったこともあって、ココに来るときにも、よ
く会う。

確か年齢は17だったかな・・・。

「そうだ、明日はよろしくな」

「明日？ 明日って、下級霊ゴーストの・・・？」

「ああ、そうだが？」

「白橋さんも行くのか？」

「うむ」

「地区は？」

「西地区だが、それより慶君、何か敬語が普通の言葉とまじってる
な・・・」

「スイマセン・・・」

「私の名前だけ敬語だな」

「年上だからなあ」

「芹那さん・・・、も、変だな・・・」

『姉御なんて、どう?』

「「!?!」」

「なんだ、朱音^{アカネ}か・・・」

「さてよ、姉御?」

「だって、そんな感じじゃない?」

「姉御か・・・、俺に、そう呼べと?」

「私が『姉御』と呼ばれるのか?」

「じゃあ、姉御、明日はよろしく!」

「ん? ああ、よろしく」

「じゃあ、慶、姉御、なににする?」

「朱音は、何かやりたい事ないのか?」

「ないから言つてんでしょ!?!」

「それもそうか・・・」

「姉御は何かない?」

「私も特には無いが、明日の戦法なんか考えたらどうだ?」

「俺たち3人以外は西地区には来ないのか?」

「そうらしいわ」

「なんで朱音が知つてんだよ?」

「一度、確認のために本部に連絡したからよ」

「ああ、そうか・・・」

「俺は接近戦しか無理だからな」

「私の武器は銃系だから、遠距離の方が有利だな」

「私も、弓系だから、遠くからのほうが有利よ」

「近距離で戦うの、俺だけかよ?!?!」

「まあ、頼りにしてるよ、慶君」

俺たちは、そのままいくつか話をして、それぞれ家へ帰った。

明日の戦闘にそなえて、今日は早く寝る事にした。

戦いに備えて・・・（後書き）

私の小説を読んでいただいて、ありがとうございます。
感想など、お待ちしております。

間違いなどがあれば、教えていただければ幸いです。

それでは・・・

登場人物紹介

〈登場人物紹介〉

式折シキオリ 慶ケイ

男 14才 身長162cm 体重49kg

霊滅団の一員、霊滅師（戦闘を担当）。

霊滅武器は剣形の『滅霊剣』めつれいけん 特に修飾は無く、刃が薄い水色。

髪は染めていないが、少し茶色っぽく、前髪も後ろ髪も、そこまで長くない。

親が共働きなので、家事は大体こなせる。兄弟は居ない。

家は南地区にあり、朱音の家と近い。朱音とは同級生。

14歳になってから霊滅団に入った。

篠崎シノザキ 朱音アカネ

女 14才 身長156cm 体重は??kg

霊滅団の一員、霊滅師。

霊滅武器は弓形の『放光弓』ほうこうきゅう 光を纏った矢が放たれる。

髪は黒、髪型は、肩くらいまでのツインテール。白いリボンで、耳の少し上辺りでくくっている。

父親は仕事に行っていて、平日は夜だけしか居ないが、母親は家で家事をしている。

家は南地区にある。慶と同級生。

霊滅団に入ったのは、13歳の時で、当時はまだ慶は居なかった。

白橋 シラハシ 芹那 セリナ

女 17才 身長169cm 体重は??kg

霊滅団の一員、霊滅師。

霊滅武器は銃形の『れいげきじゅう 霊撃銃』 ゴースト 下級霊だと、一発当てると倒せる。

実は、もう一つ、霊滅武器を持っているとか、いないとか・・・。

髪は紺色っぽい。髪型は、腰の少し上の辺りまである、ポニーテール。

アパートで一人暮らしらしい。よく霊滅団本部に来ている。

家は西地区で、慶達の家からは少し離れている。

慶や朱音の先輩で、姉御と呼ばれている。

頼りがいのある、お姉さん。

霊滅団には、6、7年前から所属していたらしい。

登場人物紹介（後書き）

一応、設定をまとめておこうと思ったので、登場人物紹介です。
感想や、アドバイスがあれば、是非お願いします。

不安

約5時半、俺はベッドから降りた。

「本部に集合する時間は8時だったな・・・」

「確か、^{ゴースト}霊が・・・ん、待てよ、何で霊が来る日にちが分かるんだ？」

「っーか、独り言か・・・」

「この町には、霊を感知するレーダーみたいなのがあんのよ」

「へえ・・・、って、なんで朱音が居んだよっ!？」

「朝早く起きちゃって、で、来てみたら、慶のお母さんが入れてくれたの」

「・・・はあ・・・」

「なによ？」

「なんでもねーよ」

「んで、レーダーがあって？」

「あ、うん、それで、そのレーダーで、霊の居場所とかが分かるみたい」

「居場所は分かるけどよ、じゃあ、霊が来る時間は？」

「んー、それは、まだよく分かってないらしいんだけど・・・」

「どう言うことだよ？」

「さあ？」

「まあ、いいか、けど、8時集合で8時より前に霊が来たらどうするんだよ・・・？」

「さあ？ その時は、直接戦いに行く事になるんじゃない？」

「テキトーだな・・・」

「ところで慶、まだ行くまでに2時間ちよつとあるけど、何する？」

「うん・・・」

「あ、そういえばアンタ、朝ご飯まだでしょ？」

「あ、そっか、なら、ちょっと食ってくる」

「食ってくる・・・って、私は？」

「優雅に朝飯を食う俺を見て、何か心に感じとけ」

「意味分かんないし」

結局、俺が飯を食ってる間、隣で武器の手入れ（？）のような事をしていた。

（必要無いハズだけどな）

しばらくの間、朱音と喋ったりして、テキトーに時間を潰した。

「そろそろ、出発した方が良さそうね・・・」

「ん？ああ、そうだな」

「どうする？アレ使って、走って行く？それとも、普通に自転車で行く？」

「アレは戦闘中にとっておいた方がいいだろ」

「じゃあ、自転車で決定ね」

「ああ、その方がいいだろうからな」

（「アレ」とは、飲むと、使用者の身体能力が大幅に上がる霊滅団の一部の人間に配布される 薬のことで少量使えば問題ないが、連続して複数回使用すると、体に副作用がある）

「じゃあ、そろそろ行くわよ？」

「ああ」

そのまま本部まで、自転車を走らせた。

「ふう・・・」

今は春とはいえ、すでに気温が高い、俺は服の袖で、汗を拭う。
「着いたわね」

「さて、入るか・・・」

俺と朱音は、中央ホールに移動して、全員が集合するのを待った。

俺は、その頃から、何か不安を感じていた。

この下級霊討伐任務で、何かが起ころうとしている・・・。。。

そんな気がしてなかった・・・。

不安（後書き）

かなり更新が遅れてしまいました、すみません・・・

また更新が遅れる事があるかもしれませんが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

それでは・・・

戦闘開始！

集合時間の数分前、最後の一人と思われる男が入ってきた。

少し茶色っぽい髪（地毛らしい）を目に少しかかるくらい、後ろは首が大分隠れるくらいまで伸ばしている。

「さて、全員そろったな・・・」

「今日は先日にも伝えた通り、下級霊との戦いだ。だが、くれぐれも気は抜かないように」

「では、各自、担当区域へ行け！」

俺たちは、司令に従い、それぞれに担当区域について、連絡を待った。

本部から、連絡が入る。

俺たちがいつも持ち歩いている、無線機。簡単に言えば携帯電話のようなものだ。

『霊が数体、それと、何か巨大な霊力の反応があるわ』
「だって・・・」

『まだ、大きい霊力の反応が何なのか分からないけど、くれぐれも気をつけてね』

「了解しました」

「大きい霊力の反応か・・・気になるな」

「ふむ・・・、もしかしたら、上級霊かも知れないな・・・」

「上級霊って・・・強いんじゃないの？」

「まあ、俺らじゃ、かなり手こずるだろうな」

「だったら、どうすんのよ？」

「もしそうなれば、私たち3人で何とかするしかないな」

「マジかよ・・・」

「さて、そろそろ敵のお出ましのようだな、朱音、慶君、準備はいいか？」

「ああ、もちろん」

「私も」

「よし、なら、いっちょ歓迎会といきますか！」

俺たちは共に武器を構え、敵を迎え撃つ

「行くぜ！」

前方へと駆け出し、剣を振る。

後方から鳴り響く銃声、放たれる光の矢。

みるみる敵の数は減っていった。

敵の数は多いものの、前より俺たちは強くなっている。

おそらく「今回は楽だ」と、みんな思っていただろう・・・。

完全に、「大きな霊力の反応」の事を忘れていた。

戦闘開始！（後書き）

かなり更新が遅れてしまいました。
申し訳ございません・・・。

これから1週間くらいは、執筆ができないので、また遅くなるかもしれません。

激闘！炎の霊操者

半数以上の霊が消えた頃だった、唐突に前方から繰り出された紅い衝撃に、俺は避ける間もなく吹き飛ばされた。

「がつ……」

攻撃をモロに受けた俺は、後ろにあった壁に叩きつけられた。

「ぐ……あ……」

「慶！？」

「慶君！？」

「仲間の心配より自分の心配した方がいいんじゃないのか？」

姉御と朱音が声のした方を睨んだ。

俺も、痛みを堪えつつ、立ち上がりながらその方向を見た。

そこには、奇妙な服装に、帽子をかぶった、黒髪の男が立っていた。

（人型の霊なんて、聞いた事ねえぞ……）

「行くぜっ！！」

その瞬間、直径１メートル近くはありそうな巨大な火の玉が朱音を襲う。

しかし、姉御もその隙をつき、男に銃弾を放つ。

朱音も火の玉を避け、反撃にしようとする、が、その時既に敵はその場から消えていた。

「何処どこっ?！」

姉御には、敵の動きが見えていた(?)らしく、姉御の指した方の家の屋根の上に乗っていた。

(なっ・・・一瞬であんな所まで・・・)

「ただの敵じゃないみたいね・・・」

「そうみたいだな」

「そんな事より、今はヤツを倒す事に専念した方がよさそうだ」

「それもそうね」

「話は終わりか?」

男が問う。

「ああ、終わりだ」

答えると同時に、俺は駆け出し、前方に大きく跳んだ。

俺たち霊滅師は、霊力と魂の力のコントロールができる。

それらをつまく活用すると、もとの人間の数倍にも及ぶ運動能力を引き出せる。

つまり、卑怯(?)な手を使えば、運動の競技なら、いくらでもいい記録が出せるって事だ。

まあ、霊との戦闘以外で、武器と力の使用は認められてないけどな・・・。

そして、敵との間合いを詰める事には成功した。
後ろで朱音と姉御が武器を構えている。

敵の頭上から、剣を振り下ろす。

「紅蓮刀！」

男がそう叫んだかと思うと、俺の剣は、紅く燃える太刀によって弾かれていた。

（コイツも剣を・・・！？）

男は、そのまま刀で斬りかかってくる。

「うおっ・・・・・・・・危ねえ・・・（汗）」

その攻撃を体すれすれで防ぎ、一度構えなおし前へ突き出す。

しかし、男はその突きをも刀で払い、すかさず攻撃してくる。

（隙が大きすぎた・・・避けきれねえ?!）

やられた、と、そう思った瞬間、後方から放たれた弾丸によって、その太刀筋はわずかにずれた。

コレならかわせる、そう思った俺は咄嗟とっさに身を捻り、回避した。

他の霊と戦いながらも、俺の方に気を配ってくれていた姉御に感謝しつつ、再び構えなおす。

「お前、なかなかやるじゃねえか」

男が言う。

「アンタもな」

俺はそう返した。

「俺は、靈魂軍・炎の靈操者、レイド・グランだ、お前は？」

「俺は、靈滅師、式折慶だ」

「そうか、上から撤退命令が出たんでな、俺はそろそろ帰るとしよう」

「靈の後始末は頼んだ！　じゃあな」

そう言って、炎の靈操者と名乗る男は、遠くへと消えて行った。

激闘！炎の霊操者（後書き）

テストとか色々あって、また更新がおそくなりました・・・（汗

1ヶ月に一度は必ず更新しようと思っています。

これからも、どうぞよろしくお願いします。

戦いの後で・・・

「はあ、はあ・・・、危なかったぜ」

「私もどうなる事かと、ひやひやしたよ・・・」

「そうだ姉御、さっきはアリガトな！」

「ん？ なに、礼には及ばんよ。仲間を助けるのは、当たり前のことだろう？」

「・・・（会話に入れない）」

「朱音、どうした？」

「え？ いや、別に・・・」

「テンションが低いじゃないか、何かあったのか？」

「特に何も無いけど・・・」

「そうか？なら、いいんだけどな」

「ただ・・・」

「「ただ？」」

「私も、もう少し強くならないといけないな、って」

「ああ、確かにな」

「今回も、敵が撤退してなかったら、どうなっていたか分からないし、な」

「まあ、もっと修行にはげめ、って事か・・・」

そんな会話をしながら、本部に今回現れた「霊操者」の情報の事を連絡し、それぞれの家に帰った。

家の鍵を開け、冷たいドアノブに手をかける。

「ただいま・・・」

そう言いながら、ドアを開ける。

もちろん、親はまだ帰っておらず、返事はない。

「まだ飯には早いし、暇だな・・・」

そんな事を考えながら、ベッドに倒れこむ。

しばらくして、沈黙を遮るように電話がかかってきた、本部からだ。

『式折 慶さん、ですか？』

「はい、そうです」

『明日、用事がなければ、本部に来てくれとの事です』

「分かりました」

特に用事もなかったはずなので、そう答えておいた。

（何かあるのか・・・？）

そんな事を考えてるうちに、大分時間が経った。

俺は飯を作って、数分で食べ終え、風呂を上がったから、朱音に電話をかけた。

『もしもし？』

「式折ですけど・・・」

『ん、慶？』

「ああ、本部から、連絡あったか？」

『あったけど、何？』

「いや、別に・・・」

『変な電話かけないでよね』

「悪い・・・」

切られた、自分でも何のために電話したか分からなくなってきた・

とりあえず、今日は昼の戦闘で疲れたから、寝よう。

ベッドに横になってしばらく考え事をしていたら、いつの間にか眠っていた。

戦いの後で・・・（後書き）

まだ学生なので、期末テストなどがあり、なかなか更新できませんでした・・・。

もう夏休みに入るので、時間のあるときは、長い話にしようと思っています。

それでは・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4526g/>

GHOST † HUNTERS

2010年11月8日08時53分発行